

財団だより

多摩川

1992・9 第55号



アオスジアゲハ(アゲハチョウ科)
タブの木やクスノキを寄主植物とする。河原の湿った所に集まる。



五本松の水制工（狛江市元和泉92年8月撮）

■ 多摩川現風景 ■

(11) 伝統的河川工法

狛江市元和泉の通称五本松の所に新たに「水制工」が施工された。ちょうど蛇行部にあたり洪水が堤防にぶつかる所で、堤防への影響を緩和しようとするものである。古くは、土や石、木杭などが用いられている。この水制工は、二子玉川の兵庫島でも小規模ながら見られる。

伝統的河川工法については、今日、多自然型川づくりを展開するにあたってクローズアップされてきたが、要は全国一律のマニュアル化された改修工法ではなく、その川の特성에あった工法の適用とか、石や土、木杭といった地場材の活用など、工法というより用法とも言うべきニュアンスであろう。

いずれにせよ、写真で見ても分かるように、水際に変化ができ、生物生息環境としての多様性

や景観の形成上の効果、水辺への接近など、単純な形状より数段意味のある工法である。

川にあわせた工法、用法、これらは川らしさを形成する大きな要素でもある。

● 関連する財団の助成研究 (Noは報告書番号)

<学術研究>

- ① 多摩川水系魚類の餌料についての研究〔河川敷流水内における稚仔魚の初期餌料についての研究〕
1983年 杉浦 宏 井の頭自然文化園 No.59
- ② 多摩川における水塊の挙動を支配する水理条件とその評価 1985年 廣沢佑嘯 東京大学 No.86
- ③ 多摩川における魚類の生息環境と免疫学的研究
1989年 出口吉昭 日本大学 No.120
- ④ 護岸が流れに及ぼす効果およびアユの生育場との関連について 1988年 玉井信行 東京大学 No.113

多摩川散歩

●鶴巻橋から陵北大橋

八王子ランドマーク研究会 鈴木 泰

日野の自然を守る会、富士堯さんに続いて鶴巻橋から左岸を8月の暑さの中、上流に向かう。

鶴巻橋下は今年7月19日に行われた第三回『浅川・川下りサバイバルレース』（「呼びもどそう、浅川の清流を！」）を合言葉に行われる日野の万願寺歩道橋までの11kmのいかだ、カヌーの川下りレースの出発点だった。

イベントそのものは川に眼を向けてもらうためのいわばきっかけづくりであり、少しずつ浅川で遊ぶ子供の姿を見ることがふえているような気がするが、川で遊ぶことを学校で禁じられているためにわざわざ違う学区で遊んでいる子供達もいると聞く。

右岸側で合流する南浅川と別れ、城山川を望み河川敷に清川児童公園を見下す所で道は炎天下の車道と別れ涼しい桜並木の土手を歩く。草むらの向う側、粘土の河床を早瀬が流れる岸に点々と黒いものが見える。亜炭化したメタセコイア（直径1mを越すものもある）化石が20株以上露頭している。子供達にも近づきやすく優れた学習資料であろう。再び堤防上に戻り中央高速道路の橋脚下を過ぎる。この附近の堤外にはかつてホトケドショウやギバチのすむ湧水があったが、護岸工事によって水辺のイヌコリヤナギなどと共に姿を消し、コンクリートが日射しにまぶしいだけである。道はこの附近で堤防と別れ、住宅街や小学校の間を抜けると、右手にこんもりとした雑木林と緑濃い崖線が見える。木陰でキツネノカミソリの朱色の花が沢山咲いている。左手はニセアカシアの林、昔の水防林の名残りかもしれない。開発の予定されている所ではあ

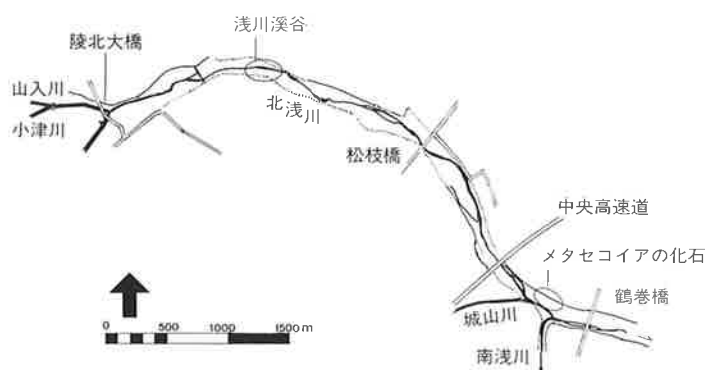
るが、これらの緑と共存する道はないのだろうか。

松枝橋で道は左岸へ。見下す河川敷にオートバイの練習場がある。この附近は湧水が豊富で古く八王子八景に詠われた華川湧水は今も^{かのうや}叶谷弁天池として健在である。工場裏の細い道を上流へ向う。松枝住宅の所からは見晴しのいい良く刈り込まれた芝の土手が続く。水も大分きれいになって水着で遊ぶ子供達の姿も多い。河道も川原を深く掘り下げようになり、市街地と川の様子も大分違って来ている。釣の対象もコイからハヤに移っているようだ。西に陣場の山なみも近く、北の加住丘陵の緑とあわせて豊かな河川空間の広がりを感じさせる所である。上壺分方小学校の北側で流れは粘土の河床を削り、溪谷を思わせ、所々に出来た淵に子供達が飛び込んでいる姿も見える。

大きな取水堰が見えて来ると道は林の中に入り、やがて広い川原が広がる。両側から山に挟まれた谷間のような地形であるが山入川、小津川が合流して小さな扇状地を作り、その上を陵北大橋が大きくまたぐように架っている。足もとの流れに、小さな木橋がかかり、水辺まで車が並び家族連れの姿も多い。この附近は浅瀬が広がり幼児の水遊びにも好適である。中には自転車を水中に乗り入れて洗車している人もいるがマナーの問題であろう。ハグロトンボが舞うツルヨシの繁みの根元にはテナガエビやウグイの稚魚の姿も見える。

今回歩いた区間の浅川は、まちの川から山への入口まで川の様子は変化に富み、堤外民地などの問題もあるが川歩き楽しさ、川の良さを十分に味わえるコースであった。

案内図



私と多摩川



三鷹市大沢2丁目附近の野川('89.9.10撮)

野川に親しむ会 小山典子

我が家は粕江の北端、足元に野川が流れるマンション住まいです。野川とのつきあいは20数年、当地に住んで7年、野川に親しむ会を始めてから4年というところです。

一口に言うなら野川は変容させられる川というところ です。

20年前の野川は水量の大部分が排水という、巨大なドブの様な代物でした。でも川の周りは原っぱ、雑木林が延々と続く自然豊かなところでした。

私が野川と離れていた10年程の間に、下水道の整備が進み川の水は何と！澄んでいました。でも川の周囲には建て物が増え、フェンスが川を遠くに追いやっていた。

あの汚なかった野川が暗きょ化されずに済んだのも、このところフェンスが低い柵に替えられ、川に降りられる様になったのも、流域の人々の粘り強い運動の成果でもあるのですが、降りられる様になる代りに公園化されてしまったり、場所によっては川の中にいかにも高価そうな巨岩が何個も配置され、野川自体が今はやりのせせらぎ公園の様にされてしまったり、つくづく自分達の無力さを味わされる日々でもあるのです。

小さな野川にあれこれとお金が入投入されるのを見ていると、塾だ、おけいこだ、ファミコンだ、ブランドものの服だとお金をかけられて野性味を失なって行く今どきの子供達とオーバーラップしてしまいます。私としてはお子様野川を何とかもとのガキ野川に戻してやりたいな、というのが活動の目標ですが、もしかして皆が望んでいるのはお子様なのかなぁと不安にかられる日も少なくないのです。それでも雨の少ない年に枯れる野川は、それはそれで暑苦しく悲しい景色ではあっても、野川は

やっぱり生きてたんだなぁと、ホッとする面もあります。そんな年には、ただまとまった雨さえ降ってくれば…と私達は考えますが、行政に見れば処理水でも流れていてくれれば…と考える様です。

今、野川には大きな三つの問題

- 関東村跡地に大規模下水処理場を建設、52万¹/石を野川に放流予定
- いこいの水辺事業と武蔵野の路という親水整備
- 武蔵野公園くじら山原っぱを第三調節池にするがあります。

各地域の住民グループが行政の各部署と話し合いを進めて来ましたが、一体東京都が野川をどう考えているのかわからない、という結論に皆たどりつき、昨年からは流域のグループが「野川ネットワーク」として連けいし、この9月5日には東京都の各部署を招いてシンポジウムを開催するべく準備を進めて来ました。

各地域での運動の歴史はかなり長いところもありますが、このネットワークはひとつのターニングポイントになり、新しい一歩になりそうです。

後年、あの年があったから今の野川が保たれているんだね、と振り返ることができる程の力を私達が発揮できるのか、正念場です。

甦れ！多摩川

仙川を行く

山道省三

野川の支流仙川を7年ぶりに上流から河口まで見た。その時も自転車だったが、源流を捜そうとかけずり回ったものの三鷹市下連雀のあたりでとうとうあきらめた記憶がある。住宅地や工場、畑などの中をクランク状に見え隠れし、際限のない追いかけてこのような気がしたからである。下連雀の三鷹消防所から上流は、急に川幅がせまくなり三面張の柵渠になってしまっている。周辺が市街化した点を除けば昔とかわらない。ところが意外と水が澄んでいる。前日の雨のせいだろうか、湧水のような気がする。三鷹市は下水道が普及率100%になったと聞かから汚水は全てカットされているはずだ。それが大きな理由かも知れない。

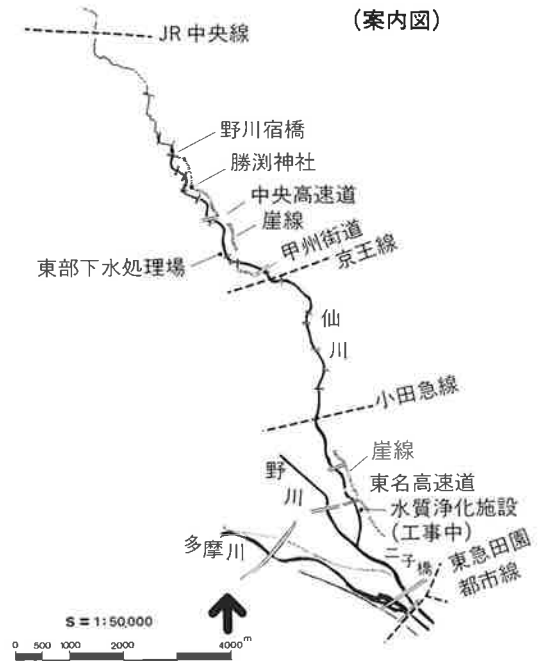
新川町にある野川宿橋から仙川は唐突に始まると言ってもよい。

新しい橋にカンバンがあって、仙川環境整備事業の紹介がある。それによると、約1.6km下流の勝淵神社に出ている湧水をポンプで圧送し、この橋の下で湧き出させているのだ。河床を見るときほど渾々と湧き出ている。これで仙川の水環境を良くしようというのだ。正直言って初めての経験である。そこから下流は護岸や河床、魚道整備が続き、以前来た時とは大きな変わりようであった。水もきれいで豊かな感じがする。セキシウムが群生する中を異常な数の鯉がうごめく。例によってさまざまな色をしたやつだ。やれやれという気がしないでもないが、一時の仙川のイメージとは裏腹の生き生きとした川の活力を感じる。しかし、それもつかの間、この流れは、調布市に入って一変する。東部下水道処理場の排水が全てを台無しにする勢いで大量に放流されている。しかもご丁寧にコンクリート杭で困った水路を流れるものだから、水質が全く良くならない。この汚れは河口まで続いている。下水道の整備は一時川をきれいにする救世主のように言われたのに、こ

れでは元の木阿彌と化すとともに、せっかく上流で湧水を集めて河川環境の整備に努めているながら、もったいない話だと思う。はたして世田谷の岡本で左岸に水質浄化施設が工事中であった。

川の水質改善の最大のネックであった水質改善は、もう何年も前からさまざまに試みられてきた。しかし、一本の川として、あるいはひとつの流域として、水循環のシステムが初めになくしては、何となく理解しがたい。下水道と河川は管理者が異なるためなかなか調整しにくい所もあるのだろうが、水という系をたち切ることなく何とかできないものだろうか。

それにしても、今度の仙川はひさしぶりにおもしろい事にたくさん出会った。上流の人工湧水、今はやりの河床整備、何もしない河床、上祖師谷の斬新で、エッ！と驚いてしまった人道橋の新設、さまざまなタイプの護岸、親水公園など……。何だか仙川は河川環境整備のモデル河川のようにもあり、その時代の変遷や流行の変化をきちんと残した展示場のような感じであった。一度、川に関わるたくさんの人達と歩いてみたい気がする。



多摩川流域の自然環境に関する催物一覧

日 時	場 所	行 事 名	主催者名・連絡先・(電話)
9月5日(土) 16:30~20:00	和泉多摩川周辺 (小田急和泉多摩川駅改札口集合)	自然観察会 - 鳴く虫の観察 -	多摩川の自然を守る会 (0426-36-0902 柴田隆行)
9月19日(土) 13:00~16:00	羽村市公民館	「TAMAらいふ21」 シンポジウム - 多摩川の二百年 -	TAMAらいふ21協会 (0425-21-2107)
9月20日(日) 13:30~16:30	東久留米市立中央図書館	市民自主企画講座 - 市民がつくるまちづくり -	東久留米市立中央公民館 (0424-73-7811)
10月18日(日) 9:30~15:00	青梅万年橋周辺 (JR青梅駅改札口集合)	自然観察会 - 秋の野外博物館 -	多摩川の自然を守る会 (0426-36-0902 柴田隆行)
11月14日(土) 10:00~17:00	電気通信大学講堂及び教室	多摩ルネサンス シンポジウム'92 - 人間と科学技術の調和 -	多摩流域テクノルネサンス 研究協会 (0424-83-2161 内線3732 事務局)
11月15日(日) 9:30~15:00	大師橋周辺 (京浜急行大師線産業道路 駅改札口集合)	自然観察会 - 晩秋の野外博物館 -	多摩川の自然を守る会 (0426-36-0902 柴田隆行)

※参加方法等詳細は直接主催者にお問い合わせ下さい。

寄贈文献の紹介

- 「ヤマメ・アマゴその生態と釣り」
加藤憲司 著 1990年4月
㈱つり人社 発行 TEL 03-3400-0904
(解説) 溪流魚の研究者として、溪流魚の生態について、写真・イラストを用いて、わかりやすく解説している。
- 「西多摩 見る・遊ぶ・味わう」
西多摩地域広域行政圏協議会 編集・発行
1991年3月 TEL 0428-22-1111(内)221
(解説) 西多摩(青梅市・福生市・秋川市・羽村市・瑞穂町・日の出町・五日市町・檜原村・奥多摩町)地域の景観、レクリエーション、郷土料理等を写真、地図で紹介している。
- 「はむらの野鳥ガイド」
羽村市郷土博物館 編集 1992年3月
羽村市教育委員会 発行 TEL 0425-55-1111
(解説) 羽村市郷土博物館が、(財)日本鳥類保護連盟に委託して行った“多摩川周辺野鳥生息調査報告書”で、代表的な野鳥を各々写真を用いて解説している。
- 「古寺と伝説の旅-東急沿線を中心に-」
新井恵美子 著 1992年5月
旬田園都市出版 発行 TEL 044-852-3382
(解説) 世田谷区、目黒区、大田区、横浜市、川崎市の東急沿線周辺の古寺をイラストマップ、写真で、紹介し、各々の伝説を語っている。
- 「東京と三多摩-都制運動参加の記-」
佐藤孝太郎 著 多摩百年史研究会編集 1992年6月
㈱東京市町村自治調査会 発行 TEL 0423-82-7722
(解説) 著者、佐藤孝太郎氏(1903年生)の「都制案運動参加の記」を資料に多摩百年史研究会が編集し、三多摩の東京府移管についてまとめたもの。
- 「アメニティ・デザイン」
進士五十八 著 1992年6月
㈱学芸出版社 発行 TEL 075-343-0811
(解説) ほんとうの環境づくりと副題がついている。著者の近代造園学者の立場から、身近な環境問題について、その思想、方法が具体的に述べられている。

第7回 多摩川週間に協賛して

今年も多摩川週間が、7月18日から24日まで、多摩川シンポジウム実行委員会（八王子市）／多摩川流域協議会の主催により開催された。

内容は「第二回全国カヌーフェスティバル」「川のコンサート」であった。

7月24日に八王子市民会館で行われた「川のコンサート」のテーマは「親子で親しむ詩情豊かな音楽川紀行」であった。

開演一時間前の午後五時前、夕立の来そうな空模様にかかわらず会場の八王子市民会館には続々と子供連れの主婦がつめかけ入口には列ができた。開会挨拶を波多野八王子市長が行い、建設省の小林京浜工事事務所長の挨拶があり、特別記念講演を作家 嵐山光三郎さんが「川の思い出スケッチ」と題して、親しみを込めた語り口で話し聴衆を魅了した。国立市出身の嵐山さんは学生時代の多摩川の思い出を、河原での飯盒炊飯のカレーライス旨さ、卒業式の後で酔っ払って多摩川の水を飲んで、ふと横を見ると犬の死体が川に浮かんでたこと、等々懐かしく語った。

国内では最上川の「芋煮」の話、松島湾のヘドロによる汚濁の話等々つきることのない川の思い出が語られた。

話しは世界の川におよび、ユーフラテス川、ナイル川、黄河、ミシシッピー川等々所変われば、品変わるで、あっという間に時間がたってしまった。いよいよお待ち兼ねの「川のコンサート」が始まった。最初に地元八王子のめじろ台フラウエンコールの『水のころ』の合唱があった。

続いて『川の歌メドレー』が島田歌穂、デュークエイセス、フラウエンコールによって演奏された『ムーンリバー』『オールマン リバー』『漕げよマイケル』『森の水車』『神田川』『黒の船歌』『川の流れるように』『小さな竹の橋で』『スワニー』『花』だれもがよく知っているメロディーが会場いっぱい流れた。

続いて島田歌穂オンステージで『オン マイ オウン』『アイム ジャスト ア ウーマン』『冬の雨』等々迫力のある歌声が聴取を魅了した。

デューク エイセス オンステージでは『慕情』『筑波山麓合唱団』『ダウン バイ ザ リバーサイド』『16トン』等々懐かしい曲が歌われ、円熟した演奏が感動を誘った。

フィナーレは客席との全員合唱で『故郷』が歌われた。「兎追いし かの山、小鮎釣りし かの川」の懐かしいメロディーが会場一杯に流れた。

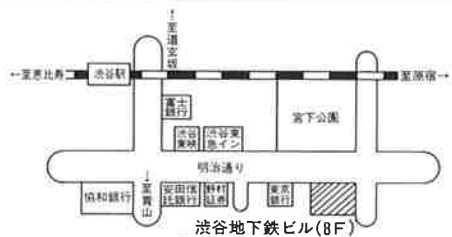
多摩川週間も第7回をむかえ毎回いろいろな行事が企画され行われる。建設省 京浜工事事務所を初めとする関係者のかたがたもたいへんなご苦労だと思われる。

約1,600名のコンサートの参加者は音楽というものを通じて「川」がいかにかの心の故郷であるかを改めて感じたのではあるまいか。

毎日の暮らしの忙しさにまぎれ、人々は川から引き離されている。川と親しみ、日常的に川に触れる機会を多くすることは人々の生活を精神的にも豊かにする。この多摩川週間の行事は非常に有意義な催しであると思われた。

常務理事 芳村重徳

- ・発行日 平成4年9月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125